

## 2 言語辞書における語義配列

宮井 捷二

### 1. はじめに

R. R. K. Hartmann および Gregory James 共著の *Dictionary of Lexicography* (1998, Routledge, pp.85-6) および Hartmann ed. (1996) によれば Lexicography (辞書学) は理論としての dictionary research (辞書研究) と実践としての dictionary-making (辞書作り) に分けられる。このうち、辞書研究は、辞書学が学問として一人立ちできなかつたために、言語学 (特に, lexicology (語彙論)) に依存せざるを得なかつた。しかし、過去数十年の間に辞書学の研究が国際的に盛んになり、辞書学の学会が誕生したり、辞書学の論文を発表するための専門のジャーナルや国際会議が実現したりして、ようやく辞書学が学問として認知されるようになった。しかし、辞書研究と辞書作りの間の境界線は、それほど明瞭でないことも確かである。

辞書における語義分類・語義配列を考える場合、語義関係や語彙素関係が中心的な課題となるので、理論的には lexical semantics (語義論) の研究の成果が最も頼りになる。

### 2. 語義分類・語義配列の基本

さまざまな語義を持つ見出し語の意味をどのように記述するかは、辞書作りが長い間取り組んで来た大きな課題である。たとえば、ある語義を他の語義の一部とみなすか、または独立させるかなどは辞書編集者が常に悩んで来た問題である。

理想的な辞書 (an ideal dictionary) (Crystal, 1986) の特徴の一つは、母語話者が持っている母語についての「語彙体系」を適切に反映していることである。特に、それぞれの見出し語の意味構造を正確に、分かりやすく表すことが肝要である。そのためには、見出し語のうち、多義語の語義をいくつにするか、どのように分けるか、どのように配列するかということが大変重要である。語義は2言語辞書では、ほとんどの場合、訳語に変わる。従って、外国人学習者に分かりやすいように訳語を配列することが要求される。

現在では、語義を古い順に配列している辞書は少なく、学習辞書では皆無である。学習辞書では語義を頻度順に並べるのが基本である。しかし、それだけで語義配列の問題がすべて解決するとは言えない。

見出し語の中心的な意味が把握しやすいように語義を配列しないと使用者には不親切である。例えば、*the Random House Dictionary of the English Language* の第2版 (RH2) のrunの項目には自動詞52, 他動詞70, 名詞55, 形容詞2の合計179の語義がただ並んで示されている (Louw 1995, pp.358-360 and p.361)。上記のRH2のrunのいくつかの定義では、superordinate (上位語) であるmoveが使われている点に注目すべきである (たとえば, run 2 = to move with haste)。これは、学習英和辞典の多義語の語義構造の記述でも、別な形で、みられることである。「グランドセンチュリー英和辞典」(2000) においては、例えば、多義語raiseの意味の全体像をカバーする代表的語義は「高くする」であり、sendのそれは「移動させる」であり (江原 1999, p.139), note n.のそれは「注意を喚起するもの」である。これらは、明らかに訳語ではなく、それぞれの見出し語の各訳語の上位語である。

多義語の語義構造を明示する考え方がはじめて英和辞典に採用されたのは、「グローバル英和辞典」初版 (1983) においてである (南出 1998, p.54)。その「まえがき」には、語義の記述について、「見出し語の語義に本義と分義を区別し、本義と分義および分義相互の間の関連を出来る限り明示しようと努めた。」と記されている。さらに、その「本書の使い方」には、「本義とは、いくつかの語義の根底にある基本的意義で、多義語の場合には、いくつかのグループに分けて

その相違を表すことがある。」、さらに、「分義とは本義の上に形成される意義で、具体的には訳語として現れるが、訳語にすぐ結びつかないときは、前に《 》を置いて補足する。」と記されている。

「グローバル英和辞典」のこのような考え方は、この辞典の編集代表者の著書、佐々木(1950)の「語義について」および「語義の体系」に源があるが、著者はすでに第2次大戦前の1930年代に、語義についてこのような独自の考えを持っていたと思われる。

たとえば、佐々木(1950, p.26)では、senseを例にあげて、「一体語義というものはどうして生じたのか、生じた語義の間に何か関係はないのか、あるとすればそれを体系的に整理することは出来ないものか、——このような反省もされないのではない。」と述べ、さらにanimalを例にあげて、多義語の体系化を説いている。animalに、①動物 ②人間以外の動物 ③四足獣 ④畜生、けだもの(人を卑しめて)の四つの意義を区別して、これらのうち①が根本的なものであると推定している。そして、この四つの意義のあいだに、少しずつ意味の一致と差異とがあり、とし、「この差異と一致という相反する関係があるためにanimalのもつ数個の意義が全体として統一を保ちえているのである。この統一された語義の全体を語義の「体系」(system)と呼ぶことができるであろう。」と述べている(佐々木1966, pp.40-41)。

### 3. 学習英和辞典の語義配列

筆者が編集にかかわった学習英和辞典ばかりでなく、現行の学習英和辞典の多くは多義語の語義構造を分かりやすく呈示する工夫をしている。筆者がかかわった学習英和辞典の語義配列の原理について、分かりやすく説明すると、概略次のようになる。“In our dictionaries, the principle is that we first divide the meanings of a headword into primary meanings, under each of which we have secondary meanings. We arrange meanings in such a way as to help users understand sense relations within the headword through Japanese equiva-

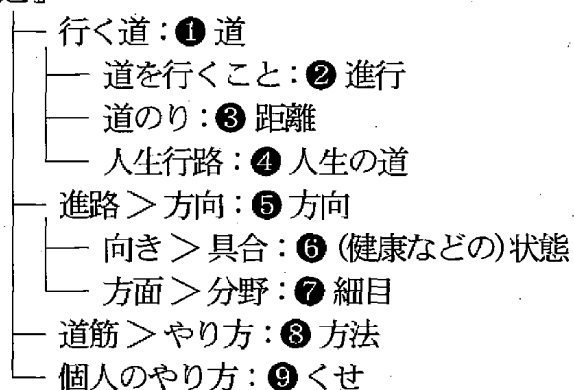
lents. Close meanings are put closer to each other; distant meanings put more distant from each other. So, there is some sort of hierarchy of meanings which can be shown diagrammatically in a 'meaning window' for the headword. This way of showing the semantic structure of entry words has come to be adopted by British EFL dictionaries. For example, we find 'signposts' in LDOCE3, and 'guide words' in CIDE." (Miyai 2000, p.4 参照).

「グローバル英和辞典」初版では、たとえばwayの本義・分義および訳語を次のように示して、見出し語の意義の「流れ」を出そうとしている。なお、本義・分義は< >で示している。

- 《道》①(a)道 (b)道路 (c)通り道, 進路
- 《進行》②進行, 前進 《人生行路》③人生の道
- 《道のり》④距離 《進路》方向》⑤方向 《方向》方面》地域》⑥近所
- 《方面》分野》⑦点 《方面》職域》⑧職業
- 《方法》⑨やり方 《習慣》⑩習慣
- 《状態》⑪状態, 具合

これが、「グランドセンチュリー英和辞典」では「意味の窓」として次のように整理されて、見やすくなった。

[[道]]



前述のように、同辞典の raise, send, note *n* の項目では、それぞれの訳語の上位語が意味の全体像をカバーする代表的語義として用いられ、次のように示されている。

## raise

動他 [[高くする]]

- 上げる：① を持ち上げる
  - ② (価格など) を上げる
  - ③ の地位を高める 図 増加
- 仕上げる
  - 育て上げる：④ を栽培する
  - 作り上げる：⑤ を調達する
- 立ち上がらせる：⑥ (ほこりなど) を立てる
  - ⑦ を建てる
- 起こす：⑧ を起こす ⑨ を奮い起こさせる
- 引き起こす：⑩ を引き起こす ⑪ を提出する
- 呼び起こす：⑫ を目をさまさせる
- 以前の状況を起こす：⑬ をよみがえらせる
  - ⑭ (包囲など) を解く

## send

[[移動させる]]

- 送る：① を送る
  - 飛ばす：② を打つ [投げる]
- 行かせる：③ を行かせる
- ある状態にさせる：④⑥ AをBの状態にさせる
  - 興奮状態にさせる：⑤ を興奮させる

## note

図 [[注意を喚起するしるし]]

- 要点の書き付け：① メモ ② 短い手紙
  - ③ 注(釈)
- 公的な書き付け：④ 覚え書き ⑤ 紙幣
- しるし：⑥ 記号
- 音符 > 音：⑦ 音色 ⑧ (鳥の) 鳴き声
- 要点 > 注目：⑨ 注意 ⑩ 著名

以下にあげる court と wrong の場合は、それぞれの語義構造を明確にするために、それぞれ [特別な目的で仕切られた場所] と [正しくない] を基本的な意味として示しているが、はたしてほんとうに user-friendly であるかどうか問題である。

## court

[[特別な目的で仕切られた場所]]: ① 中庭

- ② 幅広い短い街路
- ③ (テニスなどの)コート
- 裁判を行う場所: ④ 裁判所
- ⑤ 裁判官
- 君主のいる場所: ⑥ 宮廷 ⑦ 廷臣
- ⑧ 謁(ぎ)見式

## wrong

[[正しくない]]

- 不正な: ① 不正の
- 異常な: ② 具合が悪い
- 向きが正しくない: ③ 反対の
- 間違った: ④ 誤った ⑤ 不適當な

## 4. 今後の課題

辞書における語義構造の表示を考える場合、名詞と動詞を同等に考えられるかという問題がある。語義構造とシンタックス的な要因の関係に注目すれば、動詞の方が名詞よりもシンタックスと関係がより密接であることは明らかである。ある動詞の語義分類をしようとする、当然その動詞のシンタックス上の振る舞いを念頭において考察することになる。たとえば、動作主 (agent)、目標 (goal)、経路 (path) などの関与者 (participant) と動詞との関係を調べて、語義分類をしようとする試みも考えられる (van der Eijik *et al.* 1995)。また、Cowie (1999, p.161) によれば、たとえば動詞 play の項目の微構造 (microstructure) は様々な語義のシンタックス的な関係に基づいている。たとえば、(1) Who

should play on the wing? と (2) I think we should play Bill on the wing. とに用いられた動詞 play は ergative な関係にあり, そのシンタックス的な近接性は play の語義区分に反映される。しかし英和辞典では, ergative な関係にある語義は大抵他動詞と自動詞に分けられるので, それらの訳語は離れて配置されることになる。すなわち, 先に述べた「より近接した意味はより近くに配置する」と言う原則に違反することになる。これは動詞は自動詞と他動詞に分けるという学習英和辞典の伝統とも関係する問題である。

学習英和辞典は互いに競い合っているなかで, ますます学習者の便利さを追い求めているようであるが, 果たして user-friendly であることが学習英和辞典の第一の必要条件であるかという問題はこれからも考えて行く必要がある。

#### 参考辞典

- 佐々木達ほか編. 1983. 『グローバル英和辞典』. 三省堂.  
木原研三監修. 宮井捷二・佐藤尚孝・P.E. Davenport・芦川長三郎編. 2000. 『グランド  
センチュリー英和辞典』. 三省堂.

#### 参考文献

- Cowie, A.P. 1999. *English Dictionaries for Foreign Learners*. OUP.  
Crystal, David. 1986. 'The ideal dictionary, lexicographer and user.' In Ilson, Robert (ed.). *Lexicography: An Emerging International Profession*. Manchester University Press. 72-81.  
江原有樹子. 2000. 「語義記述の展望—Grand Century 英和辞典を考察するに当たって」. *Random* No.25. 135-143.  
Hartmann, R. R. K. (ed.) 1996. *Solving Language Problems from General to Applied Linguistics*. Exeter U. P.  
Louw, Johannes P. 1995. 'How many meanings to a word?' In Kachru, B.B. & Kahane, Henry (eds.). *Cultures, Ideologies, and the Dictionary. Studies in Honour of Ladislav Zgusta*. Lexicographica Series Maior. 64: 357-365.  
南出康世. 1998. 『英語の辞書と辞書学』. 大修館書店.  
Miyai, Shoji. 2000. 'Bilingual dictionaries in Asia: past, present and future.' *Random* No.25. 1-7.

佐々木達. 1950. 『語学試論集』. 研究社出版.

佐々木達. 1966. 『言語の諸相』. 三省堂.

van der Eijik, P., Alejandro, Olga, and Florenza, Maria. 1995. 'Lexical Semantics and Lexicographic Sense Distinction.' *International Journal of Lexicography*. 8.1: 2-27.